

Title	OE.詩における Ða構文：とくにBeowulfの場合
Sub Title	Ða-sentences in old English poetry
Author	小田, 卓爾(Oda, Takuji)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1968
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.25, (1968. 3) ,p.254- 271
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	英語英文学・独語独文学特集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00250001-0254

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

OE. 詩における Ða 構文

——とくに *Beowulf* の場合——

小 田 卓 爾

PREFACE

1943年 S. O. Andrew は ‘Some Principles of Old English Word-Order’, *Medium Ævum* III (以後 *SP* と略す) に於て OE. ða-sentence の解釈に新しい見解を示したが、更に1940年 *Syntax and Style in Old English*, Cambridge (*SS* と略す) を著わし、次の諸問題を論究した結果、極めて unique な結論を導くに至った：Sentences introduced by ða, ðær, ðonne, ðær, forðam, nu, etc. (Chs. II – IV); Relative and demonstrative pronouns (Chs. V, XII); Some syntactical groups (Ch. VI); Negatives (Ch. VII); Poetic idioms (Chs. VIII – X); Parataxis (Ch. XI). しかし各種の書評では一様に、彼の学説は ‘instructive’ ではあるが ‘convincing’⁽¹⁾なものではないと評価された。*Postscript on Beowulf*, Cambridge (*PS* と略す) は、その title の示す如く、それらに対する返答を込めて *SS* から八年後に著わされたものである。そこでは *SS* で到達した主として prose syntax に関する結論が *Beowulf* をはじめ OE. poetry 一般にも適用し得ることを証明しようとしている。今日彼の学説が如何なる程度認められているか、その点については当面の問題ではないが、*PB* 出版当時 out of print であった *SS* が最近 reprint された点から推して、その生命は途絶えていないようである。

仮に Andrew の見解が肯定されるとすれば、従来の OE. text の punc-

tuation は大きく修正されねばならない。その結果、作品の解釈も変更を余儀なくされるであろう。拙稿は、筆者の OE. 研究の一環として Andrew の学説を検討することにより、OE. poetry に於ける syntax と style の問題を考察しようとした試論の内、彼の説の起点ともなり要でもある ða-sentence 特に *Beowulf* のそれについて論じたものである。

Punctuation の問題にも及ぶため、text は *Beowulf* に関しては Andrew の云う ‘the four editions’ の他に五種用い⁽²⁾、引用文は Klaeber の 3rd edition に拠った。

I. INTRODUCTION

[1—1] 一体、OE. ða には (1) Acc. sg. fem. and nom. acc. pl. of *se* (2) Ad. (3) Conj. としての機能があるが、本稿に於て(1)は直接の関連性を持たない。(2)と(3)について、Andrew の新説に対し、所謂 traditional な文法を代表するものとして仮に *Sweet's Anglo-Saxon Primer* を考え、その Word-Order に関する記述をもとに ða-sentence の Word-Order を ða, S(subject), V(erb), O(bject) で示せば次の如くなる——

(1) Simple Principal Sentence に於て:S-V-O(V-ða, S-ða 等も minor arrangement として含める⁽⁴⁾)。

(2) Demonstrative Adverb ða に導かれた Principal Sentence に於て : Ða-V-S-(O)。

(3) Conjunction ða に導かれた Dependent Clause に於て : ða-S-O-V。(2)と(3)とで Correlative Sentence を構成する。

以上の原則は少くも OE. prose では一般的であった。しかし著者は、これらの三種の type はあくまで basic type にすぎないとし、“…; but none of them is invariably observed, and much depends on the weight and rhythm of particular phrases and on the individual style of authors.” と附言することを怠っていない。事実 Anglo-Saxon scopas は言語をより自由に駆使していた。

[1—2] 次に、従来の *Beowulf* の edition に於て ða は如何に punc-

tuatē されているであろうか。下記の分類は最も exhaustive な glossary を有する Klaeber の 3rd ed. に拠っている⁽⁶⁾ (数字は ða を含む (half-) line)

(1) — Adverb ða

a) 文頭に来る場合、87例 (但し þa gyt, gen combination を除く) :

i) Ða (….) V (….) S ; 53a, 64a, 126a, 128a, 138a, 223b, 229a, 389a, 415a, 467b, 491a, 607a, 642a, 710a, 771a, 809a, 837a, 917b, 980a, 991a, 1008b, 1136b, 1151b, 1162b, 1280b, 1288a, 1306b, 1399a, 1495b, 1527b, 1598b, 1600a, 1629a, 1644a, 1647a, 1677a, 1787a, 1802b, 1884a, 1896a, 1905a, 2117b, 2283b, 2306b, 2324a, 2472a, 2561a, 2580b, 2625b, 2688a, 2727b, 2821a, 2860a, 2957b, 2980a, 2982a, 3035b, 3058a, 3134a, 3169a (以上60例) ……710, 1162, 1600, 1644, 1802, 2980 は ‘ða com’ ; 229, 389, 415, 809, 1280, 1598, 3169 を Andrew は Conjunctive Order としている ; その他は 2982 の ‘Ða wæron’ を除き総て ‘Ða wæs’ form である。

ii) Ða (….) S (….) V ; 74a, 86a, 331b, 461b, 465a, 518b, 544a, 579b, 662a, 671a, 730b, 1095a, 1274b, 1512b, 1522b, 1605b, 1666b, 1698b, 2131a, 2312a, 2484a, 2694a, 2711b, 2715b, 2752a, 2773a, 3061b (以上27例) ……1522b を Andrew は見落している。

b) 文中第二 (時に第三・四) 番目の語彙となる場合 99例 :

i) 人称代名詞に先行される場合, 10例

ii) 動詞に先行される場合, 89例

c) その他 :

i) ond þa ; 615a, 630a, 1043a, 1681b, 1313a, 2933a, 2997a, (7例)
…Klaeber は 1681 と 1813 を Conjunction にもなり得るとしている。

ii) ond…þa (2例) iii) nu þa (2例) iv) þa git/gyt (10例)

v) þa gen (6例) vi) þa gen (1例)

(2) Conjunction ða

50例総て glossary に列挙されている……1681b, 1813a, は前述の通り ; 2372b は ða wæs ; 1078, 1813, 1988, 2204, 2287, 2926 以外

総て b-verse.

[1—3] さて Andrew によれば OE. prose には次の三種の Word-Order が考えられると云う (cf. *SP* p. 167, *SS* p. 1, *PB* p. 1) —

(1) Common order, usual in principal sentences: *Hi hine gebundon mid bæstenum rapum.*

(2) Conjunctive order, the regular form after Conjunctions and relatives: *Ða hi hine mid bæstenum rapum gebundon.*

(3) Demonstrative order, found in principal sentences of which the headword is a demonstrative adverb: *Ða gebundon hi hine mid bæstenum rapum.*

先ず [1—1] で述べた原則と [1—2] の分類を比較してみると, Andrew が提示した第一の問題点 “whether forms with conjunctive order, e. g. 1274 *ða he hean gewat*, are possible principal sentences, as the editors assume, …” (cf. *PB* p. vii) が直ちに抽出されるであろう。前表(1)-(a)-ii の27例は Conjunctive Order をもちながら Principal Sentence に punctuate されている。また 229 *Ða of wealle geseah weard Scyldinga*, 2484 *þa ic on morgne gefrægn mæg oðerne*..., などは, その adverbial phrase の性格上 prose の場合とは異なり Principal Sentence とは見做されないと云う (cf. *PB* pp. 10-11)。一方 *Beowulf* の text を厳密に調査した結果 Temporal Clause の従節化は, それが Principal Sentence に後続する場合にのみ限られていることが発見された (cf. *PB* p. vii)。その反問として Subordinate Clause の前後孰れにも Principal Sentence を求め得ると云う見解が生ずることは, 容易に想像がつくであろう。彼は34例——(1)-(a)-ii の27例と, (1)-(a)-i 中 ‘*Ða com*’ form と ‘*Ða wæs*’ form を除く7例——総てに Subordination を施すと同時に, それに対する Principal Sentence を巧みに探し出し, Conjunctive Order を有する *ða-sentence* は総て Subordinate Clause であると結論づけるに至った。

更に, その Subordination の議論を ‘*Ða com*’ form にまで拡大して行く。第二の問題点 “whether forms like *Ða com non dæges* (1600a) are

always principal sentences, as the editors also assume.”である。彼は ‘ða com’ form が Principal Sentence と見做されていることに対して、四つの反証を挙げている (*PB* pp. 10-11)。

これら二つの問題点に関する彼の見解に従えば、OE. poetry では二・三の例を除き ða で始まる総ての ða-sentence は Subordinate Clause でなければならないことになる。果して、この見解は首肯できるものであろうか。

Andrew の結論は、次の如く極めて簡潔に纏められている——

Beowulf には次の四種の ða-sentence がある (動詞は stress をとる)：

- (a) The *com* ða form.
- (b) The *he* ða form.
- (c) The ða *he* … *com* form, e. g. ða he hean gewat.
- (d) The ða *com* form, e. g. ða com non dæges.

Of, these, (a) with a noun as subject (if expressed), and (b) with a pronoun subject are principal sentences and take the place of the prose ða *com* form ; (c) and (d) are subordinate clauses. (*PB* p. 42, cf. *SP* pp. 187—188 ; *SS* p. 18)

従来 の edition ではこれら四種の ða-sentence が Principal Sentence として interchangeable に扱っているが、その処置に対し四項目の反対理由を掲げている——

(i) Such a complete confusion of types is not credible ; (ii) The limiting of subordination to clauses which follow a principal sentence is repugnant to all linguistic practice ; (iii) The extreme rarity of ða *com* forms, if they are principal sentences, is inexplicable ; (iv) The scansion, especially of (c) forms in b verse, is often impossible except on the unwarranted assumption that the adverb ða could be stressed or unstressed at pleasure. (*PB* p. 42)

[1—4] これは我々が無意識の内に見過している類の問題であり、また “Lichtenheld’s Test”⁽⁸⁾ にも似て、咄嗟に肯定とも否定とも判断のつかない

様相を呈したものである。この種の問題の解決を試みる場合 OE. poetry のもつ様々な条件を考慮し、Word-Order を中心とした言語的局面、韻律をはじめ scopas がもっていた技術、また作品解釈の面など多角度からの考察がなされねばならないであろう。以下の雑考は、上述した二つの問題を検討しながら、OE. *ða* の有する意味や特質を追求しようとする試みである。尚、‘Correlation’、‘*Ða wæs*’ その他の副次的諸問題は、論旨の繁雑を避けるため拙稿では極力言及を控えている。

II. SYNTAX & STYLE

[2—1] Andrew の疑問に触れる計 40 例と Klaeber が Subordinate Clause としている50例の *ða*-sentence の half-line に於ける文章構造を比較分類した丈でも、⁽¹⁰⁾ 其々可成り異質な特徴を具えていることが判明する。しかし此処では動詞 (finite verb) の位置に注目し乍ら、40例の Word-Order を S, V, 一部の adverb (ial) で disposing を示し分類すれば次の如くなる——

(1) 動詞が Final Position をとる場合：

i) *Ða-S-V*…a-verse：⁽¹¹⁾ なし／b-verse：461, 518, 331*, 730*, 1698*

(2) (1)の文型に ad. が後続した場合：

a-verse：544, 662/b-verse：579, 1274, 1666, 2715

(3) 動詞が Final Position をとらない場合：

i) *Ða-S-V-(O, その他)*… a-verse：74, 86, 465, 671, 1095, 2131, 2312, 2483, 2694, 2752, 2773, 3061/b-verse：1512, 1522, 1605, 2711

ii) *Ða-(O/ad.)-V-S* と ‘*Ða com*’ form については前章 (1)-(a)-i を参照。(*)は厳密な分類困難な例)

此処で、動詞が Final Position をとる例が極めて少いことに注目すべきである。

[2—2] Klaeber の edition で Subordinate Clause とされている50例の *ða*-sentence について、同様な調査により得られた結果は次の通りであ

る。

- (1) 動詞が Final Position をとる場合、⁽¹²⁾33例（内、a-verse 2）。因に、この文型の style 上の特徴を幾つか列挙すると――
- i) B half-line のみで Clause を形成する場合が可成り多く、26例を数える：e. g. *Heo wæs on ofster, wold ut þanon, / feore beorgan þa heo onfunden wæs*; (1292a-1293b).
- ii) より長い Principal Sentence に挿入される例が14例見られる：
e. g. *Ic þæt hogode, þa ic on holm gestah, / sæbat gesæt md min-ra secga gedriht, / þæt ic anunga...* (632a ff.).
- iii) 同様な表現の反復が見られる：
e. g. ..., *ða him sæl ageald* ... 1665, 2690
..., *ða hie se fær begeat* ... 1068, 2230, 2872 cf. 1291
..., *ða he gebolgen wæs* ... 723, 1539, 2550
..., *þa Metod nolde* ... 706, 967
..., *ða ic of searwum* ... *gangan cwomon*. (人称代名詞＋adverbial＋発着の動詞) ... 323, 419, 512, 539, 632, 1295, 1506, 2362, 2471, 2624, 2756, 2992, (cf. 2944)
- (2) 動詞は Final Position をとらないが、人称代名詞の Dative と独特な combination をなす *wæs*, *wearð* をもつ場合 6 例
e. g. ..., *þa him wæs manna þearf*. ... 201, 2876, (cf. 1103)
..., *ða him gerymed wæs* ... 2983, 3088
..., *ða him gebeacnod wæs*, ... 140
..., *ða him alumpen wæs* ... 773
- (3) 動詞が Final Position をとらないその他の例, 11例中――
ða-S-V: 8 例 ða-ad./O-V-S: 各 1 例 ða wæs: 1 例 (2732b)
—Simple Tense の場合 Common Order と Conjunctive Order の識別が時に困難なことも生ずるが、[2—1] と [2—2] に於ける調査を比較して先ず注意を惹くことは、後者に於ける動詞の Final Position の割合 (66%) が前者 (12.5%, 仮に Ad. が後続する例を含めても 27.5%) よ

り圧倒的に大である点である。次に、両者に於ける文章の style が相互に異質な多いことにも気付くであろう。これらの点からも、大勢として Andrew の疑問点が解消されることが推測される。

[2—3] Andrew が使用した用語 ‘Conjunctive Order’ は所謂 ‘Transposed Order’ と見做してよい。⁽¹³⁾ところで OE. の Subordinate Clause が有する最も普通の Word Order は S-O/C-V. つまり Transposed Order であった。Modern German は依然としてその姿を保存している。しかし OE. のそれは、ModE. の如き ‘Normal Order’ に移行する趨勢をもっていた。既に Early West Saxon 期に於て Transposed Order が衰退する兆があったことは、C. A. Smith によって指摘されている。⁽¹⁴⁾当時多数を占めていた Transposed Order に代って序々に Normal Order が勢力を増し、Late West Saxon 期に至ると、両者間の差異は数量に於ても意味に於ても殆ど消滅していた。Relative の例ではあるが B. Mitchell は次の二文を引用し、その事実を明示している——*Matthew* 7:24 ælc þæra þe þas min word gehyrð and þa wyrð, bið gelic þæm wisan were, se his hus ofer stan getimbrode./*Matthew* 7:24 and ælc þæra þe gehyrð þas min word, and þa ne wyrð, se bið gelic þam dysigan men, þe getimbrode his hus ofer sandceosel.⁽¹⁵⁾ 別な角度から追求して得られた結論 “the Common Order of the principal sentence is often retained in the subordinate clause.” (SP p. 177) は結果的には正当であった。

また Normalization は ‘Inverted Order’ にも認められる。次いで B. Mitchell は、OE. 初期に於て好まれていた語順 Ad.-V-S が偶々新たな Ad.-S-V により取って代われることに言及している。尤も ða-sentence に関しては Her-sentence 程頻繁ではなかったが、次の如き例が散見されることは注目に値する。——þa on þære seofodan wiecan ofer Eastron he gerad to Ecgbryhtes stane be eastan Seal wyda, 7 him to com þær ongen Sumor sæte alle, 7 Wilsætan, 7 Hamtun scir se dæl se …

(*Anglo-Saxon Chronicle* : 878)/ Ða þy ylcan gere on foran winter þa Deniscan þe on Mers ige sæton. tugon hira scipu up on Temese, 7 þa

up on Lygan; (⁽¹⁶⁾*ibid.*:895) (*SP* pp. 169-177 と *SS* pp. 3-11 では、数種の散文作品に見られるこのような type の *ðā*-sentence に対して、従節化が試みられている。)

この文型に於ても、Mod Ger. は圧倒的に ModE. より保守的である。再び B. Mitchell の言葉を借りれば、“The gradual triumph of this order S. V. O. is one of the most important syntactical developments in English.” (⁽¹⁷⁾) であった。

ところで、*Beowulf* の製作年代は何時か、また幸にも今日我々に伝っている唯一の写本 British Museum Cotton Vitellius A. XV, fol. 109a-198b が何時写字生によって書かれたか定かではない。しかし通例紀元八世紀半に原作が出来、今日の MS. は十世紀末になって写されたとされている。この点を考慮すると、*Beowulf* が上述した言語変遷の波を多分に浴びていたことが推測される。即ち、*Beowulf* MS. の誕生に至る数々の条件から、Word-Order の混合がなかったとは言い切れないのである。

〈2—4〉 Poetry と prose との間に、本質的な言語上の差異があるとは考えられない。唯、OE. poetry は語り物であり、音楽的であるために scopas は様々な技巧を凝らした。それが独特の複雑な style を伴い OE. poetry の言語が通常の OE. から乖離してゆく要因となったであろう。例えば、先に動詞が Final Position をとる例として分類したものの内、3066b-3067a: …, þa he *biorges weard* / sohte *searoniðas*; に於て、*biorges weard* と *searoniðas* とは同格であり、基本的文型 S-O-V. を複雑化している。同意語を同格にして 2nd half-line と次の 1st half-line を密接に連結するのも scopas の技術であった。⁽¹⁸⁾ 数々の技術に精通した scopas は、想像豊かに頭韻詩を物語った。技術や常套的表現は OE. 後期にまで保存されている。その伝統と scopas 個人の自由豁達な創造とが相俟って、上述した Word-Order の OE. poetry に於ける変遷の過程に如何なる影響を与えたかは容易に解決し得る問題ではない。しかし、それらが OE. poetry の文構造を複雑多岐なものにしていたことは事実である。“De cette liberté relative dans l'ordre des éléments la langue littéraire et surtout la lan-

gue poétique du vieil-anglais font un usage raffiné qui aboutit à de fréquentes disjonctions ……” と F. Mossé⁽¹⁹⁾ は云い “In the poetry as a whole there is great variety in the disposing of S, O, and V, and it is easier to speak of the word-order in any one poem than in OE poetry as such.” と Quirk-Wrenn⁽²⁰⁾ は云う。

III. Adverb ða に関する雑考—その意味の拡大

[3—1] Heyne-Schückings, *Beowulf*. 3 Teil Glossar (Siebzehnte Auflage) に於て, Ad. ða はその位置と意味の関連から次の如く分類されているが, 更にその意義を検討するために, 先ず斯様な基本的概略を念頭に置く必要があるだろう——

- (1) an der Spitze des Satzes vornehmlich zwecks Einführung eines neuen Moments in die Handlung.
- (2) Tiefer im Satze, vornehmlich an zweiter Stelle zur Bezeichnung eines ruhigen Fortschritts in derselben Handlung.

[3—2] さて前述した唯一の *Beowulf* MS. は紀元十世紀末に書かれたと推定されるが, その後今日に至るまで夥しい損傷を被って来た。しかし好古家 Thorkelin の無意図的貢献や ultra-violet 応用などにより, 判読の幅も広げられ, 今日我々はその facsimile にも接することができる。

Julius Zupitza: *Beowulf*, EETS を紐解くと *Beowulf* の最後の Fitt (section) は XLIII となっている。Fitt に関しても諸問題はあるが, その殆どが “a definite break in the narrative”⁽²¹⁾ に置かれているところから, その機能は詩歌の所謂「節」を示すと考えてよいであろう。今 Fitt の冒頭の文章を見ると次のようである (度々問題となる XXVIII-XXX と, XXXIII と XXXVIII の間の (X)XX は無視する)——

- (1) ða を含む文: 19例, 括弧内は内訳:
 - i) Ða-S-V (4)
 - ii) ‘Ða wæs’ / ‘Ða com’ (5/1)
 - iii) ‘Com ða’ (7)

iv) Ða gyt/‘Him ða’ (各1)

(2) ‘Maðelode’ formula: 9例

(3) その他: 14例。

半数にも近い Fitt が ða を有する文で始まっていることに注目すべきである。また scopas の技術でった ‘maðelode’ formula は新たに direct discourse を導くものであり、それが9例を数える点 ða の意義を類推せしむるものである。

次に、MS. 内部の point について、その機能が如何なるものか定義づけることは困難であるが、幾重もの曖昧な条件を通して、無意味丈が残るとは考えられない。残された確実な意味、例えば Klaeber の言及 “These marks may be said to correspond to major or minor syntactical pauses or, in a good many instances, merely to divisions of breath-groups.”⁽²³⁾ を前提として、ða-sentence と point の関係から前者の意義の一端を窺うことができるであろう。次表は ða-sentence の直前に point が打たれているかどうか、その有無の頻度数を示している (Fitt の冒頭を含む; 「不明」は、主として、margin と共に焼失せる箇所) ——

(1) Adverb ða		有	無	不明
i) prec. by pers. pron.	10例中:	6	3	1
ii) prec. by verb	89例中	47	28	14
iii) 疑問とされた	40例中	19	17	4
(2) Conjunction ða	50例中	5	42	3

さて以上 Fitt と point の調査から、Ad. ða は文を起す要因をもって、いることが推則されるであろう。また Klaeber の言及を念頭に置きつつ point と ða-sentence の関係を見る時、各頻度数は Subordination の見解が容易に肯定され得ないことを暗示している。

[3—3] Ða の文中での意味合と上述の結果を考え合わせると、それは新たな物語の開始時から諸行為の情景の移行に至るまで、種々の転調時に scopas によって発せられた語と云えるであろう。Klaeber はこれを “the simple way of connecting sentences by the monotonous *pa*” と呼び “a

primitive or, perhaps, 'natural' method of expression, suggesting the manner of conversational talk or of recitation before a crowd of listeners" ⁽²⁴⁾ であると言う。

しかしこの manner は、総ての作品に亘って頻繁に用いられていたとは云えない。作品により、その頻度にも可成りの差異が見られる。概して、叙事的な長詩には頻繁に用いられ、内面的な感概を露呈した詩には少いと云えよう。例えば、有名な "the two *Beowulf* elegiac passages" ⁽²⁵⁾ (今や孤独の身となった宿将の一人が、宝物を塚に運び歎き悲しむ歌2247—66/我が子を失った父の歎き2444—62) には、この manner は見られず却って Ad. þonne が二度用いられて居り、Anglo-Saxon 抒情詩中最も典型的な *The Wanderer* に於ても、115行中 ða は無く、少くとも4例以上の Ad. þonne が文を起している ⁽²⁶⁾。因に ða と þonne、両者間の差異を考える時、この現象は注意を惹く。

Ða は物語の進行の際、scopas の口からついて出た軽い発声にも近い「吟誦の要素」であり、既に文法的、品詞的規範を越えた曖昧な領域にまで意味が拡大していたと考えられるのである。この意味の拡大は、ða の位置が極めて自由であることに結びつく。Half-line の最前頭は勿論、最後尾の位置をもとり、行中第四番目の語となることも可能である。(e. g. 2192b næs mid Geatum ða/sincmaðpum selra on sweordes had;). その結果種々の文型の ða-sentence が生れるに至った。

拡大された ða の意味とその位置の自由さを念頭に置く時、OE. poetry に於てそれが常に文法的拘束力を有していたとは容易に信じ難い。時に拘束力が緩和されることもなかったであろうか。仮に ða が文頭に来たとしても、常に Inversion を誘発したとは限らないと私は考える。

[3—4] Ða の用法の多くが、聴衆を前にして朗誦した際の manner の一種であったことは充分頷ける。それはまた朗誦の調子を整える要素として、長短・強弱にも可成りの融通性を備えていたであろう。

'Ða com' form が Subordinate Clause である理由として "Unless we deny the adverb ða its stress, we have in four of the lines an unknown

metrical type with four stresses, e. g. *ða cóm nón dæges* (1600a). (cf. *PB* pp. 12, 109; *SS* p. 12) が第三に挙げられている。ところで、E. Sievers の *Angelsächsische Metrik* を立証した A. J. Bliss は H. Kuhn の所見に依り、韻文の構成要素を ‘stressed elements’, ‘particles’, ‘proclitics’ に分別しているが、Ad. *ða* は particle であり、通常 unstressed であるが時に positional stress をとることも可能である。‘*Ða com*’ form に関する疑問、また *Ymbeode þa* との関係について、韻律の面からも解答が与えられるであろう。⁽²⁷⁾ *Ða* が OE. poetry では常に stress をとると云う仮定は “unwarranted” であり、“at pleasure” ではなかったが、stress の面に於てもそれは可成りの幅をもっていたのである。

更にまた、rhythm を整える際にも *ða* は効果的な機能を發揮していたものと推測される。⁽²⁸⁾

IV. 解釈の諸問題

[4—1] Andrew は P.-versions (従来の punctuation による R. K. Gordon の literal translation) と S.-versions (彼の punctuation によるもの) 各五例を比較対照して、後者の効果的なことを主張している(*PB* p. 17)。⁽³⁰⁾

この優劣の判断は多分に主観的要素が加わる可能性があり、極端に走るべきではないが、作品解釈上不可欠なものでもある。単に描写内容の観点のみから判断すれば、P. と S. との比較により、両者の間に差異が生ずる場合と生じない場合とが識別され、前者には従節化が効果的な印象を与える例も散見される。例えば—— Beowulf と Grendel の母の格闘する湖が、波騒ぎ血に染まる様を湖岸の人々が不安の内に見守る場面(1591a ff.) に於て、*þa ðæs monige gewearð, / þæt hine seo brimwylf abroten hæfde.* (1958b-1599b) の *þa* を Causal Conjunction として従節化すれば、確かに可成り引締った文体を有する Compound Sentence が得られるであろう。しかしその P.-version も valid であり、両者間に客観的優劣を決定し難い。

以下解釈の面から見て、Subordination の問題点を簡単に列挙しておく。

[4—2] 主節を ða-sentence に先行する文に求めた場合：

(1) Ða 以後に大きな転調が認められる時、不自然な意味を呈する：86a, 331b——総てに亘って云えるが、特にこの場合 quotation の短いことが誤読を招く一因となる。Beowulf の一行が Dene に上陸し、聴て Hroðgar の重臣 Wulfgar との対話となる場面 (320a ff.) に於て、Wulfgar が語る前に武人の武具の描写が並列している。主文は何処までなのであろうか。またその Supposed Subordinate Clause と後続する direct discourse との関係も曖昧である。86a は更に注意を要する。

(2) 二文の事件が同時的である場合、ða を continuous use of ða (= ‘whereupon’) とすれば (cf. *PB* p. 6) 意味上の差異はない：730b, 1666b, etc. ——尤も、この処置は Andrew の一妥協点と見做せないでもない。

(3) P.-version で ða が ‘and then’, ‘after that’ を意味する場合、Conjunction とした ða の意味の解釈に難点が認められることがある：579b, 3061b, etc.

[4—3] 主節を ða-sentence に後続する文に求めた場合：

(1) 転調が見られる時：a-verse；229, 671, 809, etc. / b-verse；461, 518, etc. ——これは詩人の技術の観点から説明がなされている (cf. *PB* pp. 88-91) その説明自体は論理的であるが 86a の ða-sentence にもそれが当嵌まる。また従節化を施さずとも P.-version は意味上不都合はなく ‘retardation’ の心配もない。

(2) P.-version で sequence を告げる ða：389b, 1274b, etc.——語り物として考えた場合、従節化によって得られた文と前文との間に断絶が感知されることがある。

(3) S.-version が複雑化した例：i) 671a, 1512b, 2715b —— 其々 674, 1516b-1517b, 2717b-2719b を “asyndetic co-ordinate clause” として Subordinate Clause に含める。ii) 229a, 662a——同様に 232b-233b, 664a-665a を “parenthesis” として Subordinate Clause に含める (*PB* pp.6-7)。—— P.-version も当然 valid であり、複雑化のために文の簡潔性を犠牲

にする必要はない。この処置も妥協点と見做せるであろう。

[4—4] 他に ‘Ða com’ 5 例, ‘gefrægn’ formula 5 例 (“poems or sections of poems” を導く 2694a, 2752a と “some sort of progress in the narrative” を示す, 74a, 2484a, 2773a⁽³¹⁾), 1522b などの従節化が有効かどうか疑問である。

ところで以上の疑問は、主に *Beowulf* を吟誦する scopas を事実上無視した点に発している。また style を無視した場合、とかく以上の如き二文に時制など幾つかの条件が揃えば、一方を従節化し、極めて簡単に plausible な Compound Sentence を構成し得るものである。Andrew の見解の曖昧性は、このような点にも潜んでいたと思われる。

V. CONCLUSION

[5—1] これまでの雑考で得られた OE. poetry に於ける ða-sentence の意義をもとに punctuation の方法についてその要旨を纏めておく。

一体、OE. poetry の ða-sentence には原則として次の四種を考えることができる——(a) Normal Order を有する (Simple) Principal Sentence の minor arrangements としての ‘He ða’, ‘Com ða’ 型。Ða gyt, ða gen, nu ða 等の Combination. (b) Ða + Normal Order. (c) Ða + Inverted Order. (d) Ða + Transposed Order.

さて *Beowulf* に於て ——

(a) は (Simple) Principal Sentence となる。

(b) は Principal Sentence, Subordinate Clause 孰れにもなり、即座に両者間の識別を下すことが困難になる場合が多い。

(c) は通例 Principal Sentence となる。一部は、特に wæs, wearð と結合して Subordinate Clause をなし、特徴ある style を示す。

(d) は通例 Subordinate Clause となる。数行にも及ぶ長いものは少く b-verse のみからなる例が可成り目立ち、それらの多くは style に特徴が見られる。時に何らかの条件から動詞が Final Position をとり、Principal Sentence になる場合もある。

ところで、ða-Normal Order の解釈を即座に下せない場合、此処に editor また時に reader の適切な判断が要求される。E. V. Gordon は *The Battle of Maldon*, 1.5 の þa を Conjunction としているが、その註に於て彼は次の如く解説している。：“Yet it is possible also that þa is here the adv. ‘then’, and that 1.7 begins a new sentence. The punctuation and interpretation adopted here seem more in keeping with the word-order and with the rapid fluent movement of the poem at this point.”⁽³²⁾

[5—2] 今日まで世に出た数々の *Beowulf* の edition の内、相互に punctuation が完全に一致したものは恐らくないと思われる。しかしその場合、一方が誤りであるという議論は成立しない。一定原則を超越した領域では、卓越した作品解釈との融合を見なければならないのである。OE. poetry に於ける ða に関しても、それが大きく意味を包含し発展して行った語であるだけに、尠くもその取扱いを簡略に過ぎるべきではない。

註

- 1) *The Year's Work in English Studies*, 1940 & 1950; *RES*, 1941 & 1950; *MLR*, 1941; *JEGP*, 1942. 等を参照。
- 2) W. J. Sedgefield, *Beowulf* (Manchester, 1935); F. Holthausen, *Beowulf* nebst den kleineren Denkmälern der Heldensage (Heidelberg, 1948); Fr. Klaeber, *Beowulf with the Finnsburg Fragment* (Boston, 1950); Wyatt-Clambers, *Beowulf with the Finnsburg Fragment* (Cambridge, 1952) 以上の「四種」の他に B. Thorpe (1855, reprinted 1962), E. van K. Dobbie (1953), E. P. Magoun (1959), Heyne-Sehückings (1963), C. L. Wrenn (1966) の各 ed. を併用し (年度数は本稿に於て使用した ed. の出版年度), J. Zupitza, *Beowulf* (facsimile). EETS, 1882, 2nd ed. 1959 を絶えず参考にした。
- 3) N. Davis (rev.), *Sweet's Anglo-Saxon Primer*. Oxford, 1965. Word-Order に関しては pp. 59-61. を参照。
- 4) Cf. Quirk-Wrenn, *An Old English Grammar*. Methuen, 1955, reprinted 1963, p. 94.
- 5) Davis, *op. cit.*, p. 61.
- 6) Editor 間で品詞の解釈上極端な差異は見られないが、本稿で取扱う ða について相違箇所を列挙しておく—— i) Andrew が疑問とした Ad. ða. 40例中：229a (Thorpe), 389b (MS. になし), 461b (Tho.), 465a (Tho.), 518b(Tho.),

- 1598b (Sedgefield, Waytt-Chambers, Tho.??). ii) Klaeber が Conj. とした 50 例中: 402b (Tho. “þ(ær)”, canceled by Sed., Holt., Magoun), 733b (Tho., Ma.), 1295b(Cha.), 1681b(Sed.??, Holt.??, Ma., Heyne-Schückings, Wrenn), 1813a (Sed.??, Holt., Dobbie, Ma., Schü., Wr.), 2230b (MS. faint), 2287a (ambiguous), 2372b (Sed., Holt., Tho.), 2567b(Holt., Tho.), 2624b (Tho.), 2690b (Tho.??)/2629b (MS. þa, all edd. “þæt”).
- 7) Klaeber は 2287a þa se wyrm onwoc を Principal Clause に先行させている。Cf. E. V. Gordon (ed.), *The Battle of Maldon*. Methuen, 1937, reprinted 1964. 11.5 & 84. また Order of Clause に関しては Quirk-Wrenn, *An Old English Grammar*. p. 95 を参照。
- 8) Cf. R. W. Chambers, *Beowulf, an Introduction to the Study of the Poem*. Cambridge, 1921, 3rd ed. 1959, pp. 105-107.
- 9) 以後 2629b を除き 1522b を加えて40例とする。
- 10) 特に ða に直続する語に注目すべきである。
- 11) 以下27例の Ða S V 型には Ða … SV … /Ða S…V(…)/Ða S V(…)の三種がある。
- 12) 但し, 稀に rigorous な判断を下し難い場合が生ずる。
- 13) Cf. *JEGP*, p. 86, note. 同様に “Demonstrative” = “Inverted”, “Common” = “Normal” が云える。
- 14) Cf. C. A. Smith, ‘The Order of Words in Anglo-Saxon Prose’ *PMLA*, VIII (1893), p. 222. 山本晶, ‘The Word-Order of OE. Prose’ (『芸文研究』 No. 17, 1964) は, OE. 後期の散文 *Apollonius of Tyre* の Word-Order を克明に調査することにより Smith の見解を統計的に実証した。
- 15) Cf. B. Mitchell, *A Guide to Old English*. Basil Blackwell, 1965. pp. 62—63.
- 16) Cf. Earle-Plummer, *Two of the Saxon Chronicles*. Oxford, 1892, reprinted 1952. The Parker MS.
- 17) Cf. B. Mitchell, *op. cit.*, p. 61.
- 18) Cf. 厨川文夫「Anglo-Saxon scopas の技術的知識に関する雑考」(市河博士還暦祝賀論文集 pp. 6-20.)
- 19) Cf. *Esquisse d'une Histoire de la Langue Anglaise*. Lyon, 1947, deuxième édition, 1958. p. 25.
- 20) Cf. Quirk-Wrenn, *op. cit.*, p. 93.
- 21) Cf. E. van K. Dobbie, *Beowulf and Judith*. New York, 1953. p. xxv.
- 22) Cf. Klaeber’s 3rd edition. p. 1v.
- 23) Cf. Klaeber, *op. cit.*, p. c.

- 24) Cf. Klaeber, *op. cit.*, p. lxvii.
- 25) 行数は C. L. Wrenn, *Beowulf*. Harrap, 1953, reprinted 1963. p.76. による。
- 26) Cf. R. F. Leslie (ed.), *The Wanderer*. Manchester Univ. Press, 1966. 1. 39, note (p. 73).
- 27) Cf. A. J. Bliss, *The Metre of Beowulf*. Basil Blackwell, 1958, reprinted 1962. p. 6.
- 28) Cf. Bliss, *ibid.*, pp. 14-15.
- 29) J. C. Pope, *The Rythm of Beowulf*. Yale, 1942, the 1966 ed. に於ける ða の取扱い方に注目。
- 30) R. K. Gordon, *Anglo-Saxon Poetry*. Dent, Everyman's Library No. 794.
- 31) Cf. Klaeber's 3rd ed., p. lxvii.
- 32) Cf. E. V. Gordon, *op. cit.*, p. 42. n.

<付記>

拙稿 IV は、筆者の修士論文第二章の skeleton である。本題の考察を進めるに際しては、厨川文夫教授の懇切なる御指導を仰ぐこと屢々であった。此処に感謝の意を表したい。但し、筆者の初学者としての欠陥については、先輩諸兄の適切な御批判を賜りたい。